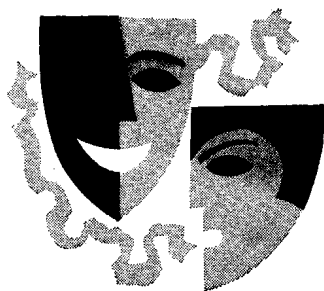


ソビエト現代劇集

野崎韶夫編訳



白水社

編訳者略歴

一九〇六年生

早大文学部中退

一九二八―三二年ソビエト留学

ロシア・ソビエト文学・演劇専攻

元早大教授、慶大講師

主要著書

「魅惑のソビエト・パレエ」

主要訳書

「モスクワ芸術座六十年史」

「モスクワ芸術座の演劇修業」

ソビエト現代劇集

定価三八〇〇円

一九八一年八月二十五日印刷
一九八一年八月二十五日発行

編訳者

◎

野

崎

韶

夫

発行者

中

森

季

雄

印刷者

河

北

喜

四

良

発行所

株式会社

白

水

社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部

〇三(二九)七八二一

編集部

〇三(二九)七八二一

振替東京九十三三二八

郵便番号 一〇一

東京河北印刷・黒岩製本

(分) 0097 (製) 53240 (出) 6911

目次

逃	亡——八つの夢——（ミハイール・ブルガーコフ）	3
マージェンカ	（アレクサードル・アフィノゲーフ）	79
クレムリンの大時計	（ニコラ・イ・ポゴジン）	139
とわに生きるもの	（ヴィクトル・ローゾフ）	217
七度目の出会い	（セルゲイ・ミハルコフ）	291
密林地帯	（バーヴェル・ヤーリツェフ）	303
悪	日（ミハイール・ゾーシチェンコ）	317
解		329
野崎韶夫訳	ロシア・ソビエト戯曲初出一覧	349
あとがき		351

ミハイール・ブルガーコフ

逃 亡——八つの夢—— 四幕

生滅のあなたは、静かに明るい岸辺、
われらの道は、ただ彼岸を目ざす、
安らかに眠れ、逃亡を終えしもの。

——ジュコーフスキ

登場人物

停車場司令

駅長

ニコラーエヴナ 駅長の妻

オーリカ 駅長の娘、四歳

パラモーン・イリイチ・コルズーヒン セラファイ

マの夫

チーヒイ 防諜機関長

スクーンスキイ

グーリン 防諜機関員

白軍司令官

切符売場の女

アルトゥール・アルトゥーロヴィチ 〈ゴキブリの王様〉

山高帽をかぶり、主計の肩章をつけた人物

情愛の深いトルコの母親

美貌の娼婦

ギリシア人のドン・ジュアン

僧、白軍参謀將校、白軍司令官の護衛コサック兵、防諜機関

員、マント姿のコサック兵、イギリス・フランス・イタリア

の水兵・船員、トルコ・イタリアの警官、トルコ人・ギリシ

ア人の子供、窓際のアルメニア人・ギリシア人の顔、コンス

タンチノーブルの群衆

セラファイマ・ヴラジーミロヴナ・コルズーヒナ

ベルブルグの若い婦人

セルゲイ・パーヴロヴィチ・ゴルブコフ ペテル

ブルグの大学教授（観念論者）の息子

アフリカーン シムフェローポリおよびクラスバザールの

大主教、名門部隊の高僧、または化学者マフロフ

バイーシイ 修道僧

よぼよぼの修道院長

バーエフ プジョーンヌイ騎兵軍団連隊長

プジョーンヌイ軍兵士

グリゴリー・ルキヤノヴィチ・チャルノータ ザ

ボロージェ・コサックの白軍騎兵少将

バラバーンチコワ チャルノータ將軍の想像のなかにのみ

存在する婦人

リューシカ チャルノータ將軍の軍隊妻

クラピリーン チャルノータの伝令、弁舌さわやかなため

身を減はした男

デ・ブリザール 白軍の輕騎兵連隊長

ロマーン・ワレリヤノヴィチ・フルードフ

ゴロワーン コサックの大尉、フルードフの副官

第一の夢は一九二〇年十月、北タヴリヤでの出来事。

第二、第三、第四の夢は一九二〇年十一月はじめ、クリミヤ

での出来事。

第五、第六の夢は一九二二年夏、コンスタンチノーブルでの出来事。

第七の夢は一九二二年秋、パリでの出来事。

第八の夢は一九二二年秋、コンスタンチノーブルでの出来事。

第一幕

第一の夢

……わたしは修道院の夢をみた……

地下室から修道僧の合唱隊のうつろな歌声が聞こえる。「聖神父ニコラ―イや、われらのために、神に祈りたまえ……」

暗闇、やがて聖像のそばにそなえられた蠟燭によって、かすかに照らされた修道院の教会堂の内部が現われる。ゆらめく焰が暗闇のなかから、蠟燭を売る斜面机、かたわらの広いベンチ、格子をはめた窓、褐色の聖者の顔、天使たちの色あせた翼、黄金の後光などを照らします。窓の外は曇降る、わびしい十月の夜。ベンチには頭から馬具の毛布をかぶって、バラバーンチコワが横たわっている。

皮の長外套をきた化学者マフロフが窓際にたたずんで、たえず窓から何物かを見きわめようとしている。

修道院長用の高い肘掛け椅子には、黒いシュ―バをきたセラフイーマが坐っている。顔色からみて、セラフイーマは気分がすぐれないらしい。

セラフイーマの足もとのベンチには、トランクをかたわらに、黒い外套を着て手袋をはめた、ペテルブルグ風の身なりをした青年ゴルブコフが坐っている。

ゴルブコフ（歌声に聴きいりながら）聞こえますか、セラフイーマ・ヴラジミロヴナ？ わかりました、この下に地下室があるんですね……。まったく、不思議ですねえ、なにもかも！ ねえ、僕は時どき、夢をみているような気がするんです、ほんとうですよ！ あなたと一緒に村から町、町から村へと逃げ廻っているうちに、もうひと月になります。そして先へ行けば行くほど、ますますわからなくなってくるんです……。こうして二人で教会堂まで来てしまったじゃありませんか！ ねえ、今日の騒ぎがもちあがったとき、僕、すっかりペテルブルグが懐しくなってきたんです、ほんと！ 急に、はつきりと書斎の緑のランプを思い出したんです……

セラフイーマ　そういう気持ちになるのは、危険ですよ、セルゲーイ・パーヴロヴィチ。放浪の旅に出て故郷を懐しがるなんて、用心なさることだわ。あなたはお残りになったほうがよかつたんじゃない？

ゴルブコフ　いや、いや、いまだら、かえらぬことですよ、もうなるように、なれです！ それにあなただって、もうご存知じゃありませんか、僕の苦しい旅路をやわら

げてくれるものがなんであるかを……。あの暖房貨車のカンテラの下で偶然お会いしてから、おぼえていますか……実際、ほんのわずかしが過ぎていないのに、僕はずつと、ずつと前からあなたを知っていたような、気がするんです！ あなたのことを考えると、この秋の夜霧のなかを落ちのびて行くのも、それはど苦にはなりません。クリミヤまであなたをお連れして、ご主人にお渡しすることができたら、それだけでも僕は誇りを感じ、幸福です。あなたがいなくて淋しくなるでしょうが、僕はあなたの喜びを自分の喜びとするつもりです。

セラフィーマは黙ってゴルプコーフの肩に手をかける。

(彼女の手をなでて) あ、熱があるじゃありませんか？
セラフィーマ いいえ、なんでもないのよ。
ゴルプコーフ どうして、なんでもないんです？ 熱ですよ、たしかに熱だ！

セラフィーマ たいしたことないのよ、セルゲイ・パウロヴィチ、すぐなおるわよ……

遠い大砲の音。

バラバーンチコワは身じろぎして、呻く。

あのう、奥さん、あなた、人手を借りずには、とてもすまされませんよ。誰かに村までひとつ走りしてもらったら……あそこには、きつと、産婆さんがいるでしょうから。

ゴルプコーフ 僕が行ってきます。

バラバーンチコワ、黙って彼の外套の襟をつかむ。

セラフィーマ どうしてそれがお嫌なんですか、奥さん？
バラバーンチコワ (わがままに) 行かないで。

セラフィーマとゴルプコーフは腕に落ちない。

マフローフ (小声でゴルプコーフに) 不思議な、まったく不思議なご婦人だよ！

ゴルプコーフ (ささやく) じゃ、あなたは……

マフローフ わたしはなにもわかりませんがね……こういう動乱の時代ですから、どんな人に出つくわすものか、わかったもんじゃありませんよ！ 教会堂のなかに、へんなご婦人が横たわっている……

地下の歌声が静まる。

バイーシイ（音もなく現われる。暗い、びくびくした顔つき）
身分証明書、身分証明書を、ご用意ください、みなさん！（二つだけ残して、蠟燭を全部吹き消す）

セラフィーマ、ゴルブコフ、マフローフは身分証明書をとりだす。バラバーンチコワは片手を出し、身分証明書を馬具の毛布の上におく。

パーエフ（登場。短い毛皮の半外套、泥だらけで、興奮している。パーエフのうしろには、カンテラをもったフジョーンヌイ軍兵士が続く）さつさとくたばってしまえ、この坊主ども！ どうだ、この悪党どもの巢窟は！ おい、坊主、鐘楼に上る螺旋階段はどこだ？

バイーシイ こちら、こちら、こちらです……
パーエフ（フジョーンヌイ軍兵士に）見てこい。

カンテラをもったフジョーンヌイ軍兵士、鉄の扉のなかへ姿を消す。

（バイーシイに）鐘楼に明かりをつけたらう？

バイーシイ 滅相もない！ なんで、明かりなんぞ？

パーエフ 明かりがちらちらしたぞ！ よし、鐘楼でなにか見つかったら、貴様たち一人残らず、老いぼれの院長

もろとも、銃殺にしてくれる！ 貴様ら、カンテラで白軍に合図をしやがったんだ！

バイーシイ おお！ 滅相もない！

パーエフ ところでこいつらは、いったい何者だ？ 修道院には他所者（よそもの）は一人もおられませんと、いったじやないか！

バイーシイ これは避難民です、避……

セラフィーマ 同志（トビッチ） わたしたちはみんな、村で一斉射撃にあつて、修道院に逃げこんだんです。（バラバーンチコワを指さし）ほら、この人だって、今、産気づいたところなんです……

パーエフ（バラバーンチコワに近づき、身分証明書を手にとり、読む）バラバーンチコワ、既婚……

バイーシイ（恐怖のため狂乱状態になり、ささやく）ああ、ああ、なにとぞ、無事にすんでくれますように！（今にも逃げだそうとする）至聖なる、はまれ高き大殉教者ドミートリイさま！

パーエフ 亭主はどこにいる？

バラバーンチコワ、呻く。

パーエフ とんでもない時に、とんでもない所で、お産をはじめたもんだ！（マフローフに）身分証明書！

マフローフ はい、これです！ わたしはマリウポーリからきた化学者です。

バーエフ 前線地帯に化学者が、馬鹿に多いじゃないか！
マフローフ わたしは食料の買い出しにきたんです、キューリを……

バーエフ キュウリだって！

ブジョーンヌイ軍兵士（不意に現われる）同志バーエフ！
鐘楼ではなにも見つかありませんが、実は……（バーエフに耳打ちする）

バーエフ なんだと！ どこから？

ブジョーンヌイ軍兵士 間違ひありません。とにかく、真つ暗なのです、同志連隊長。

バーエフ よし、よし、行こう。（身分証明書をさしだすゴルブコーフに）時間がない、時間がない、あとで。（バイーシイに）坊さんたちは、つまり、内戦には加わらないということだな？

バイーシイ そうですとも……

バーエフ お祈りをするだけか？ ところで、いったい誰のために祈るのか、そいつが知りたいもんだ。黒い男爵のウランゲリ將軍か、それともソビエト政權のためか？ まあいいさ、すぐまた会えるんだ、明日にでもはつきりさせよう！（ブジョーンヌイ軍兵士とともに退場）

窓の外でうつろな号令が聞こえ、まるで何事もなかったかのように、静まりかえる。

バイーシイは一生懸命に、何度も十字をきり、蠟燭に火をともし、姿を消す。

マフローフ 行ってしまった……。その手あるいは額に刻印を押させ——とはよくいったものですよ……。あの星の徽章にお気づきですか？

ゴルブコーフ（ひそひそ声で、セラフイーマに）僕はまったく途方にくれますね。だってここは白軍の手中にあるはずなのに、いったいどこから赤軍が現われたんです？

不意打ちの戦闘かな？ どうしてこんなことになったんでしょう？

バラバーンニコワ それはクラープニコフが、將軍じゃなくて糞つたれだからですよ！（セラフイーマに）失礼、奥さん。

ゴルブコーフ（機械的に）それで？

バラバーンニコワ なにがそれでなんです？ あいつは赤軍の騎兵隊が背後にいるという至急報をうけとりながら、畜生、解読を朝までのばして、ヴィント（カルタの一種）をやりだしたんですよ。

ゴルブコーフ それで？

バラバーンニコワ 切り札がハートで、負け札一枚ときめ

たんです。

マフローフ（小声で）ほほう、それはおもしろい人物だ！
ゴルブコーフ 失礼ですが、あなたはどうかやら、よくご存知らしいですね。僕は、このクルチヤーンにチャルノータ將軍の司令部があるはずだと聞いてきたんですが……
バラバーンチコワ ずいぶんくわしくご存知ですね！
そう、司令部はありましたよ、なくてどうします。ただし司令部は引き揚げましたよ。

ゴルブコーフ いったいどこへ行っただんです？

バラバーンチコワ きまつてるじゃありませんか——行方不明ですよ。

マフローフ あなたはどうしてそんなことまでご存知なんです、奥さん？

バラバーンチコワ あなたは、大主教さん、ほんとに好奇心が強いですね！

マフローフ 失礼だが、あなた、どうしてわたしを大主教などとお呼びになるんです？

バラバーンチコワ まあいい、まあいい、それは退屈な話だ。あっちへ行ってください。

パイーシイが駆けこんできて、また一つだけ残して蠟燭を全部消し、窓の外を見る。

ゴルブコーフ またどうかしたのかい？

パイーシイ おお、あなた、神さまが誰をわたしたちのところににおつかわしになったのか、まるでわかりません。夜中まではたして無事でいられるか、どうか！（まるで消えてなくなるように、姿を消す）

蹄の音が聞こえ、窓に焰の照り返しがゆらぎだす。

セラフイーマ 火事？

ゴルブコーフ いや、あれはたいまつです。さっぱりわけがわかりません、セラフイーマ・ヴラジミロヴナ！
白軍です、絶対に白軍です！ とうとう来るものが来た！ セラフイーマ・ヴラジミロヴナ、おかげでわれわれはまた白軍の支配下にはいりましたよ！ 将校は肩章をつけてます！

バラバーンチコワ（馬具の毛布にくるまって、坐る）いまいいしいンテリ野郎、口をふさいでろ！「肩章」「肩章」なんて！ ここはペテルブルグじゃない、タヴリヤだ、油断のならねえ土地なんだ！ きみが肩章をくつつけたって、それで白軍になったということにはならん！ もし変装した部隊だったら？ そのときはどうする？

不意に、おだやかに鐘が鳴る。

ほら、鳴りだした！馬鹿者の坊主どもが、とうとうご難をくったか！（ゴルブコーフに）どんなズボンをはいてる？

ゴルブコーフ 赤です！……あつ、またやってきた、こん

どは赤筋のはいつた青です……

バラバーンチョコワ 「筋のはいつた」だって！……畜生！

縦じまのはいつただろう？

「第一騎兵中隊、降りろ！」というデ・ブリザールのにぶい号令が聞こえる。

いったいどうしたというんだ？ そんなことがあるはずがない！ たしかにあいつの声だ！（ゴルブコーフに）さあ、こんどは怒鳴ってもいい、こんどは思いきり怒鳴っていい、おれが許可する！（馬具の毛布とほろをかなぐり捨て、チャルノータ將軍の姿になって跳びだす。彼は揉みくちやになった銀色の肩章のついたチュルクス服を着ている。手にもったピストルをポケットに押しこみ、窓際へ駆けより、開け放つて、叫ぶ）ごきげんよう、軽騎兵諸君！ ごきげんよう、ドン・コサツクの諸君！ ブリザール大佐、来てくれたまえ！

扉が開かれ、まっさきにリュウシカが駆けこんでくる。看護

婦頭巾をかぶり、皮のジャケットを着、拍車のついた長靴をはいている。

彼女のあとから、頬ひげをはやしたデ・ブリザールと、たいまつをもった伝令クラビリン。

リュウシカ グリーシャ、グリ、グリ！（チャルノータの首にしがみつくと）とても信じられないわ！ 生きてたの？ 助かったの？（窓から叫ぶ）軽騎兵のみなさん、聴いてください！ 赤軍の手からチャルノータ將軍を奪い返したのよ！

窓の外でざわめきと叫び声。

リュウシカ あたしたち、あんたの追悼のミサをしようとしてたのよ！

チャルノータ おれはおまえの頭巾ぐらいの間近に、死と対面したのだ。クラブチョコフの司令部へ出かけて行ったら、やつは、畜生、ヴィントを一番やろうというんだ……ハートの切り札で、負け札は一枚……そこへ機関銃の一斉射撃だ！ 降って湧いたようなブジョーンヌイ軍の襲撃だ！ 司令部はめちやくちやにやられてしまった！ おれは防戦しながら、窓から跳びだし、野菜畑を通過して、村のバラバーンチョコフ先生のとこへ行き、身分

証明書をくれといったんだ！　ところがやつこさん、あわてふためいて、おれに握らしたのが、とんでもない証明書さ！　この修道院へ逃げこんで、見たら、女の証明書——細君の、マダム・バラバン・ニコワの旅券、しかも妊娠中という証明書じゃないか！　あたりは一面赤軍だ。さあ、このままおれを教会堂のなかに横たえてくれ、というわけさ！　横になって、いよいよお産だというところに、ガチャガチャ拍車の音がする！

リュージカ　誰なの？

チャルノータ　ブジョーンヌイ軍の隊長さ。

リュージカ　まあ！

チャルノータ　おれは考えたよ、いったいどこへ、ブジョ

ーンヌイ軍の兵隊さん、拍車を鳴らして行くんだい？

おまえの死は毛布一枚の下に横たわっているというのに！　さあ、毛布をさつさと、はいでしろ、はいでしろ！　おまえなんか、音楽の伴奏で往生させてやる！　ところがやつこさん、バスポートは手にとってみたが、毛布ははいでみなかった！

リュージカが金切り声をあげる。

（駆けだして、扉のところで叫ぶ）　こんにちは、コサツクの衆！　ごきげんよう、村の衆！

叫び声が聞こえる。リュージカはチャルノータのあとから駆けだす。

デ・ブリザール　おれは毛布をはいでやるぞ！　この修道院で誰かを血祭りにあげてやらなかったら、おれの名がすたる！　この連中は、おそらく、赤軍があわてて、忘れて行っただろう！　（マフローフに）おい、おまえは証明書なんか詮索しなくてもいい。その髪の毛だけでも、どんなしろものかわかってる！　クラビーリン、こっちへ明かりを見せてくれ！

バイーシイ（飛んでくる）　滅相もない、滅相もない！　こちらは大主教殿下ですぞ！　こちらはアフリカーン大主教さまですぞ！

デ・ブリザール　こん畜生、きみはなにをいつてるんだ？

マフローフ、帽子と皮の長外套を脱ぎ捨てて。

（マフローフの顔を見つめる）　これはどうしたことだ？　猯下、これはまさしくあなたにちがいない？　どうしてこんなところへ、おいでになったんです？

アフリカーン　ドンの軍団に祝福をあたえるために、クルチュラーンへ行ったら、赤軍の襲撃で捕えられたのさ。ありがたいことに、修道僧たちが身分証明書を都合して

くれてね。

デ・ブリザール さっぱりわけがわからん！ (セラフィーマに) おい、ご婦人、身分証明書！

セラフィーマ わたくしは商務省次官の妻でございます。

ペテルブルグで手間どっているうちに、主人はもうクリミヤにまいっております。でわたくし、主人のところへ急いでいるところです。はい、これが偽の身分証明書で、こちらがほんもののパスポートでございます。コルズーヒナと申します。

デ・ブリザール *Millie excuses, madame!* (幾重にもおわびいす語) それからこっちの、平服の青虫さん、まさか元老院の局長さんじゃないだろうね？

ゴルブコフ 失礼ですが、僕は青虫じゃありません。それに元老院の局長でもありません。僕は有名な理想主義者のゴルブコフ教授の息子で、僕自身も大学講師です。ペテルブルグからあなたがたの、白軍のところへ逃げてきたのです。ペテルブルグでは仕事をするのができません。

デ・ブリザール それはたいへん光栄だ！ ノアの箱舟というわけか！

床の、鉄帯をはった昇降口が開かれ、そこからよほよほの修道院長が上ってくる。あとから蠟燭をもった修道僧の唱歌隊。

修道院長 (アフリカーンに) 大主教さま！ (修道僧に) 兄弟

たち！ われわれは罪深い社会主義者の魔手から大主教さまを救いだし、お守りする光栄に浴しました。

修道僧たちは興奮したアフリカーンに長いマントを着せ、錫杖を渡す。

大主教さま！ ふたたびこの錫杖をとり、信徒たちの信仰をかためさせられんことを……

アフリカーン 主よ、主よ、天より臨み見て、この葡萄園にくんだり、汝の右の手にて植えつけし者をかためたまえ (聖書礼拝の祈りの句)！

修道僧たち (突然歌いだす)「主よ、いくとせも、いくとせも……」

扉のところにリュウシカとともに、チャルノータが姿を現わす。

チャルノータ 神父さんがた、気がふれたとでもいうんですかい？ とんでもないときに、そんな儀式をはじめたもんだ！ さあ、唱歌隊！ (出て行け)という身振りをする)

アフリカーン 兄弟たち！ 行ってください！

修道院長と僧たち、地下室へ退場。

チャルノータ (アフリカーンに) 大主教さま、どうしてまた、こんなときに礼拝などをおはじめになったんです？逃げ出さなきゃならんところですよ！軍団がわれわれのあとを追っかけてきて、一網打尽にしようとしているんです！ブジョーンヌイがわれわれを海のなかへ叩き落とそうとしてるんです！全軍退却！クリミヤへ行くのです！ロマーン・フルードフの傘下へはいるんです！

アフリカーン やれやれ、これはいったいどうしたことだ？ (自分の皮の外套をつかむ) 二輪馬車はおもちですな？ (姿を消す)

チャルノータ 地図をくれ！クラビールン、明かりを見せろ！ (地図を見る) どこもかしこも、ふさがってる！もうおしまいだ！

リュージカ ああ、あのクラブチョコフ、クラブチョコフ！……

チャルノータ 待てよ、あなを見つけたぞ！ (デ・ブリザールに) 連隊をひきいてアルマナイカへ行け。敵軍をすこし引きつけておいて、バービー・ガイへ行くんだ。たとえ首まで水につかっても渡河するんだぞ！おれはドンの兵隊をつれてモロカン教徒の村へ行く。そしてきみ

より遅くなくても、アラバーツカヤ地峡に出て、あそこで合流しよう。出発まであと五分だ！

デ・ブリザール 承知しました、閣下。

チャルノータ ふう！……一杯飲ましてくれ、大佐。

ゴルブコーフ セラフィーマ・ヴラジミロヴナ、お聞きになりました？白軍は撤退です。われわれも一緒に逃げなきゃなりません。さもないと、また赤軍にひっつかまります。セラフィーマ・ヴラジミロヴナ、どうして返事をなさらないんです、どうしたんです！

リュージカ あたしにもちようだいよ。

デ・ブリザールは水筒をリュージカにやる。

ゴルブコーフ (チャルノータに) 將軍、お願いです、われわれと一緒に連れてってください！セラフィーマ・ヴラジミロヴナが病氣なのです……われわれはクリミヤへ行くところなんです……あなたのところには、野戦病院があるでしょう？

チャルノータ あなた、大学を出たんですか？

ゴルブコーフ もちろん、そうです……

チャルノータ まるで教育のない人間という感じだね。もしバービー・ガイで頭に弾丸が命中したら、野戦病院がおおいに役立つとでもいうんですかい？レントゲン室